

# 幕府撰日本図に見る近世越中の地域像

深井 甚三

The Area Picture of ETTYU-Country in the Edo Era that is Seen in Japanese Figure of Edo Shogunate Preparation

Jinzou FUKAI

キーワード：江戸幕府, 日本図, 越中国, 絵図, 地理

Keywords : Edo shogunate, Japanese figure, ETTYU-Country, Picture-Map, Geography

## はじめに

近世には様々な日本図が作成された。その中でいうまでもなく最重要なのは、幕府が作成した日本図である。豊臣政権の後を引き継いだ徳川政権は、全国土を掌握した政権としての正当性を示すためにも、全国60余州の国絵図を大名らに作成、提出させ、これを基に日本図を作成した。慶長、寛永、正保、元禄、そして天保と各時期に国絵図が作成されたが、これらの国絵図から寛永、正保、元禄、享保の各日本図が作成されたことが判明しており<sup>(1)</sup>、その図や写が現存する。慶長の日本図については記録がなく作成されなかったとも考えられているが<sup>(2)</sup>、作成されなかったことが論証されているわけでもない。

正保以前の日本図についての研究が近年大いに進み、川村博忠氏により、佐賀県立図書館所蔵蓮池文庫の日本図や山口県公文書館蔵毛利家文庫の日本図が寛永10年国絵図をもとにした日本図写であること、また国会図書館蔵のいわゆる慶長日本図は寛永15年(1638)の島原の乱直後に作成された日本図と指摘されたが、海野一隆氏も後者の絵図と同内容の中井家文書の「日本国中図」が寛永16年に作成された「日本国中之総絵図」の写として紹介された<sup>(3)</sup>。ただし、川村氏も認めるようにこの寛永16年日本図の内容がそれ以前に作成された寛永10年日本図より古い慶長期の内容も含むという問題を抱えている<sup>(4)</sup>。また、この寛永10年図とされている日本図に描かれた越中国の内容を寛永10年国絵図略図と比較する限り、大枠はその内容を継承しているものの、街道記載の点で異なる所もあった<sup>(5)</sup>。しかし、いずれにしてもこの寛永10年日本図は正保日本図以前に作成されたことは間違いなく、寛永期のものとみ

てよいのである。さらに、正保日本図についても藤井讓治氏により明暦大火で焼けた正保日本図の写が国立史料館蔵の日本図で、寛文9年(1669)以降に作成された正保日本図写が中之島図書館や秋岡コレクションの日本図写であることが指摘されている<sup>(6)</sup>。

幕府撰日本図となれば写であっても当然に大型で、貴重な絵図のために簡単に閲覧などできるものではない。しかし、早くからその所在が判明していた正保・元禄・享保の日本図写は写真版が作成されており<sup>(7)</sup>、その描かれた内容を知ることができる。また、近年は毛利家文庫の日本図も写真で紹介されている<sup>(8)</sup>。筆者はこれらの写真版に加えて、幸いなことに写真版のない蓮池文庫や国立史料館の日本図の実物も閲覧したので、享保以前の幕府撰日本図をすべて見ることができた。

さて、この日本図の基になった国絵図については、越中国の国絵図を対象にしてその作成と描かれた内容について検討している<sup>(9)</sup>。そして、前記のように幕府撰日本図の基礎研究が進展しているので、これらの成果をこの国絵図自体の検討の成果も踏まえることにより、幕府撰日本図にどのように地域が描かれたか、その変遷を把握できることになる。そこで、今回、幕府が作成した日本図に加賀藩領の加越能地域がどのように描かれたか検討することにした。前記のように正保日本図だけでなく、初期日本図についても複数の写図の日本図を見ることができたので、原図の日本図の記載、描写内容を把握できるので、これを加越能のうちまず越中国について本稿で検討するものである。なお、寛永の二つの日本図については国会図書館蔵日本図を以下の本文では寛永A日本図、蓮池文庫蔵日本図と毛利家文庫蔵日本図は寛永B日本図と記載する。

幕府撰日本図は、いうまでもなく大名らが提出した国絵図をもとに作成されたもので、幕府が全国各地の地域をどのような姿のものとして把握、認識することになったかを示すものである。また、これを直接に見るのは将軍や幕閣ら幕府役人であり、実際に将軍吉宗は頻りにこの日本図や国絵図を閲覧していたことが知られている<sup>(10)</sup>。日本図に描かれた地域像は当然に彼らに各地の地理状況を示し、その基本的な情報となるだけに重要なものである。

## 一、初期日本図

### 1、寛永A日本図

国会図書館蔵の日本図に下に記載する慶長日本図といわれてきた著名な絵図の寛永A日本図がある。これは前記のように島原の乱直後に作成された日本図といわれているものである。また、この日本図はその大きさや彩色、内容などからみて原本とされている。近年この原図の写図とされる中井家旧蔵の日本図も海野一隆氏により紹介されているので<sup>(11)</sup>、これに付記する<sup>(12)</sup>。

ア、国会図書館蔵「幕府撰慶長日本図」

彩色・手書

三七〇×四三四センチ

イ、京都大学図書館蔵「日本図中図」

彩色・手書

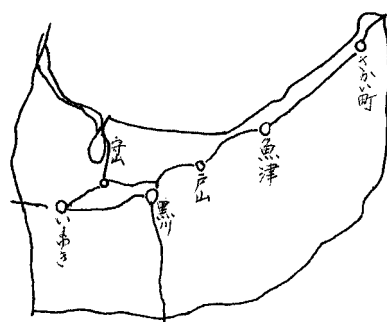
四三〇×二七八センチ（但し、右辺は貼り足し含め三五七センチ）

表1 寛永A日本図（「幕府撰慶長日本図」）

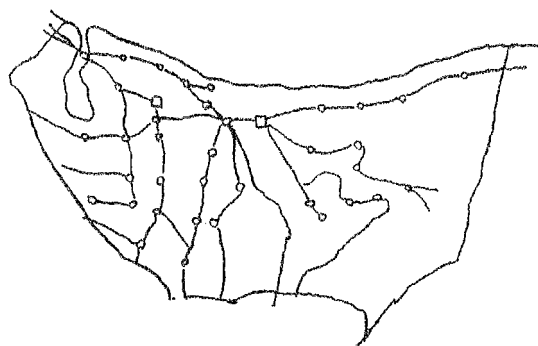
海路	なし 湊の注記 なし
島	なし
瀉	布施瀉のみ記載
山	山形、三カ国境に山並み
川	青線（「おやべ川舟渡」・庄川・神通川） 「小出川口渡」「神市川歩渡」「くろべ川歩渡」「かと川歩渡」） 「くろべ川歩渡」
城下町	特別記載無し
町	「守山」・「戸山」・「いまゆき」 「黒川」「魚津」「さかい町」
道	赤線（別図参照）

備考、本図は国会図書館蔵

寛永A日本図（国会図書館本）



寛永B日本図（蓮池文庫本）



寛永B日本図（毛利家文庫本）

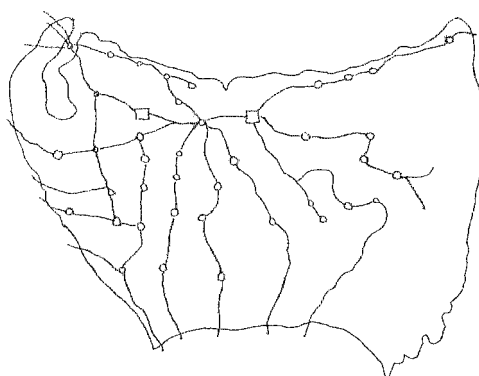
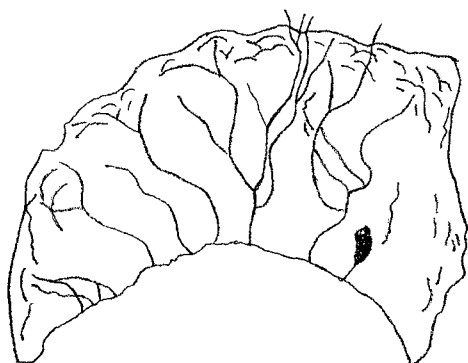
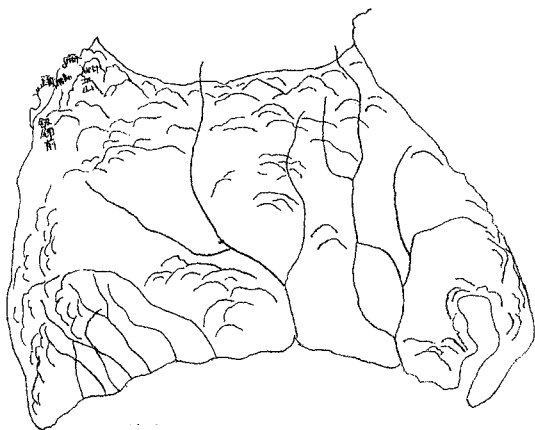


図1 寛永日本図の描く越中と街道

寛永A日本図（国会図書館本）



寛永B日本図（毛利家文庫本）



寛永B日本図（蓮池文庫本）

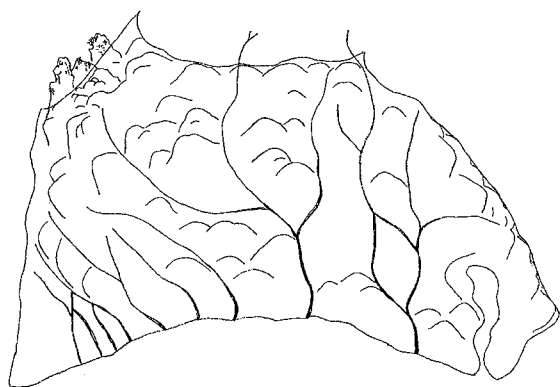


図2 寛永日本図の描く山川

海野氏はこの日本図の作成時期は寛永としても、この原図には慶長年間に作成された日本図が利用されているのではないかとした。表1に寛永A日本図の概要を示し、あわせて図1に同絵図に記載された街道を示した。これらからもわかるように、この日本図には高岡の記載がなく代わりに守山を富山・今石動などととも記す。富山も中世来の表記である「戸山」と記載する。高岡が成立していない時期の越中をこの図は描いているので、この日本図の越中は慶長14年（1609）以前の越中となる。このため原図は慶長期に作成された絵図を基にしているのは間違いない<sup>(13)</sup>。

こうしてこの日本図の描く越中は、この図の作成された寛永期ではなく、越中の場合はその原図が描かれた慶長期のものとなる。残念ながらこの日本図の基になった元図は現存しない。

この絵図によると瀧は布施瀧のみが記載され、放生津瀧などの瀧が描かれていない。その形状も図1に見るように寛永B日本図とそう変わりのないものとして描かれている。ただこのA図は直接海に大きく開くのではなく、湊川の川筋が描かれているので、この点は寛永B図より正確といえる。

図2には日本図の川や山を示したが、この川は神通川・小矢部川・庄川・黒部川など代表的な越中の河川がみな取りあげられている。ただし、この寛永A図には表1に見るようにこれらの河川に舟渡しか歩渡しであったかの注記がある。

その流路で特に興味深いのは黒部川である。これは寛永B図とほぼ同様の記載であり、慶長から寛永期の黒部川の流路がこのようなものであったことを示唆する点で重要である。神通川と小矢部川・庄川の流路も、図2に見るように両日本図に若干の支流描写で違いがみられるものの、全体的には同じである。

この日本図で興味深いのは街道のルートであり、図1に示したように北陸街道（北陸道）の交通の結节点的な位置が富山ではなく黒川となっている点である。飛騨街道への分岐点が黒川とされていて富山となっていないのである。守山からは今石動・富山へ結ぶ街道に加えて、氷見から能登へ向かう街道が海岸沿いに記載されているのも特徴的である。

山については図2に見るように皺のような簡略な描写による山の表現が行われ、国境を主に山並みのあることがうかがえる表現がされている。この絵図

には富士山や出羽三山などが描かれているものの、立山については特定の山とわかる表現はされていないし、またその注記もされていないのがこの日本図の特徴といえる。

なお、この絵図には海路や島の記載・描写が行われていない。

## 2, 寛永B日本図

寛永B日本図は寛永10年（1633）の国絵図をもとに幕府が作成したと指摘されている日本図である。これは慶長16年作成の寛永A日本図よりも内容が新しい部分もあったが、いずれにしても正保以前の寛永期の日本を描いたものである。

この日本図の原本の存在は不明である。しかし、次の写の絵図がある<sup>(14)</sup>。

### ア、蓮池文庫蔵「日本之図」

彩色・手書・3舗

（中央部）182×135センチ

（東北地方）384×279センチ

（西国地方）321×290センチ

### イ、毛利家文庫蔵「日本中州絵図」

彩色・手書・三舗

奥州羽州全図 188×154センチ

日本中洲絵図 374×292センチ

山陰山陽四国九州絵図 396×321センチ

両絵図の記載内容は表2の通りである。

表2 寛永B日本図

	蓮池文庫本	毛利家文庫本
海路	越中部分記載なし 湊の注記 なし	左同 左同
島	なし	左同
潟	布施潟のみ記載	左同
山	信州境に立山三山を描く ただし、三山の注記なし	左同 「立山」「劔御前」記載
川	青色	紺色
城下町	赤色□で富山・高岡	左同
道	赤線（別図参照）	黒線（別図参照）

備考 蓮池本・毛利本は蓮池文庫蔵「日本之図」と毛利家文庫蔵「日本中州絵図」

この日本図の描く街道を元図とされる寛永10年の越中国絵図と比較しなければならないが、残念ながら同国絵図の現存は不明である。参考のために同国絵図を簡略にした国絵図とあらためて比較してみることにする（図3）<sup>(15)</sup>。



佐竹文庫蔵「越中国」

図3 寛永国絵図略図

この日本図は、表2に見るように海路や湊記載がないものの街道記載が詳細である特徴を持つ。この日本図のもとになったと指摘されている国絵図を簡略化した国絵図の特徴とこれは同じであり、当然ながら原図となる日本図をそのまま引き継いだとみてよい。しかし、この国絵図に記載されている唐島などの島はこの日本図には描かれずに省略されたことがわかる。また、この国絵図に記載された布施潟はそのまま大きく描かれている。ただし、先に指摘しているが、放生津潟などの潟は国絵図同様に記載されていないこともこの絵図の特徴であり、原図も同様であるとみてよい。

山を見ると、簡略図は図3に示したように国境三方に当然に山並みを描くが、立山連峰については南東の信州方向の国境、つまり信州方面となる国境に「立山」と注記した若干大きな山を描くだけである。蓮池本と毛利家本の立山は若干描き方が異なる。蓮池本は簡略本同様に信州境に三つの大きな山並みを描くが、毛利本はこの国境に山並みを描くもののその内側に立山と劔御前と記載された二つの山を描いている。この日本図では詳しく立山を描き、山の注記もある毛利本が原本に近いものではなかろうか。ただし、いずれにしても簡略本同様に日本図では当然ながらまだ黒部奥山は描かれないことになった。

川については詳しく描いた簡略図よりも日本図は省略されている。それでも図2に見るように、神通川と小矢部川・庄川に加えて黒部川・布施川・早月

川と常願寺川とみられる川が蓮池本・毛利家本には同様に描かれている。このため日本図からは越中の主要河川である上の三つの川の存在に加えて、富山以東の新川郡に川の多いことがうかがえることになる。なお、その流路については前記のように黒部川は特徴的な姿を描くが、これは簡略図に対応しているものである。また、簡略図の川の流路で特徴的なのは、神通川では富山の南にデルタ状になっている所があるのと、庄川でもその河口の所がデルタ状に描かれている点であるが、ただしこの日本図では前記の特徴点とともに略されている。

街道については図1に示したように蓮池本・毛利家本は詳細に記載している。やはり街道を重視した日本図として作成されていたことがわかる。この両日本図と簡略図の記載する街道を具体的に示すと、表3の通りである。

蓮池本と毛利家本の内容はほとんど同じであるが、一部の地名で前者がひらがなのところに後者がカタカナを使っているところが異なる。原本がどちらであるか不明となるが、いずれにしても原図の日本図は同内容の記載とみてよい。

街道がかなり詳しく描かれたこの日本図は簡略図に対応するような街道が描かれている。日本図には宿駅制度がしかれていた北陸街道・能登道に加えて、浜街道、守山から高岡経由の北陸街道へいたる道、今石動・高岡間の道、巡見使道、飛騨街道東道・同西道などの越中の基本的街道はみな記載されてい

る。そして、これに加えて、北陸街道の黒川から湯山をへて水無経由の飛騨街道や長棟経由、有峰経由の飛騨街道まで記載されていることになる。

しかし、簡略図との違いも若干見受けられる。その違いの第一点は、寛文年間に整備される愛本橋経由の北陸街道のいわゆる上街道が簡略図には記載されているのに、日本図にはみられないことである。この黒部川上流に愛本橋以前に橋が設けられていたともされているので、寛文以前にまったくこの橋がなかったとも言い難いのが現状である<sup>(16)</sup>。第二点は飛騨街道の記載である。日本図は飛騨街道を黒川も起点として黒川から三つの飛騨への街道を描いている。これに対して簡略本は黒川が記載されず、中田から水無経由の飛騨への街道を描き、飛騨街道西道も日本図のように神通川左岸をそのまま経由する街道を記載せずに、八尾経由の街道か、牛ヶ増の先で左岸へ渡る加賀沢経由の街道を記す。さらに、有峰道が日本図では、簡略本と異なって飛騨へ抜ける記載のない特徴もある。以上に加えて、伏木・岩瀬間の浜街道の記載が簡略図にない違いもある。

こうした違いは簡略図が寛永10年国絵図をもとにしたものではないことや、日本図自体が寛永10年図ではない可能性を示す。寛永10年図でなければ寛永15、16年に改めて幕府が西国の大名などに国絵図を提出させているので<sup>(17)</sup>、この時に提出された国絵図をもとにした可能性が考えられることになる。

しかし、寛永10年図から日本図作成の基になった

表3 寛永B日本図の街道

簡略本	: 北陸街道 : (越後) - 「塚町」 - 「魚津」 - 「富山町」 - 「三戸田」 - 「中田」 - 「新町」 - 「今石動」 -
蓮池・毛利本	: 同 : (越後) - 「塚町」 - 「戸山」 < 「富山」 > - 「黒川」 - 「今ゆするき」 < 今ユスルキ > - (能登)
簡略本	: 能登道 : 「今石動」 - 「守山」 - 「氷見町」 - 「中田」 - (能登)
蓮池・毛利本	: 同 : 「今ゆするき」 < 今ユスルキ > - 「森山」 - 「水上」 < 氷見 > - (能登)
簡略本	: 浜街道 : 記載なし
蓮池・毛利本	: 同 : 「水上」 < 氷見 > - 「伏木」 - 「放生津」 - 「岩瀬」
簡略本	: 守山・高岡道 : 「守山町」 - 「高岡」 - 「新町」
蓮池・毛利本	: 同 : 「森山」 - 「高岡」 - < 新町への道記載なし > 「新町」
簡略本	: 巡見使道・五ヶ山道 : 「新町」 - 「中野」 - 「庄」 - 「水無」 - (飛騨)
蓮池・毛利本	: 同 : 「新町」 - 「中野」 - 「城かはな」 < 城カハナ > - 「赤尾」 - (飛騨)
簡略本	: 五ヶ山道 : 「中田」 - 「阿別当」 - 「城鼻」 - 「福光」 - (飛騨)
蓮池・毛利本	: 同 : なし
簡略本	: 脇道 : 「今石動」 - 「福光」 - (加賀)
蓮池・毛利本	: 同 : 「今ゆするき」 < 「今ユスルキ」 > - 「福光」 - (加賀)
簡略本	: 飛騨街道 : 「富山町」 - 「五福」 - 「八尾」 - 「切詰」 - (飛騨)
	: 「富山町」 - 「阿弥陀古寺」 - 「牛ヶ増」 - 「加々沢」 - (飛騨)
	: 「富山町」 - 「阿弥陀古寺」 - 「牛ヶ増」 - 「猪谷」 - (飛騨)
	: 「富山町」 - 「阿弥陀古寺」 - 「牛ヶ増」 - 「長棟」 - (飛騨)
蓮池・毛利本	: 同 : 「戸山」 < 「富山」 > - 「黒川」 - 「八尾」 - (飛騨)
	: 「戸山」 < 「富山」 > - 「湯山」 - 「水なし」 < 「水ナシ」 > - (飛騨)
	: 「戸山」 < 「富山」 > - 欠 < 「城野尾」 > - □□ (破れ) < 「カ沢」 > (神通川左岸) - (飛騨)
	: 「戸山」 < 「富山」 > - 「うしかます」 < ウシカ増 > - 「吉野」 < 「ヨシノ」 >
	: 「戸山」 - 「うはとう」 < 「ハトウ」 > - 「うれ」 -
簡略本	: 上通り : 「荒町」 - 「浦山」 - 「舟見」 - 「太家」
蓮池・毛利本	: 記載なし

備考 &lt;&gt;は毛利本の記載

簡略本は佐竹文庫蔵他「越中国図」、蓮池・毛利本は蓮池文庫蔵「日本之図」と毛利家文庫蔵「日本中州絵図」

広域図作成の際に修正が行われたことや、簡略図自体が作成されるに際して修正をほどこされたり、寛文年間に写された際に修正されたことも考えられる<sup>(18)</sup>。このため蓮池文庫本や毛利家文庫本が寛永10年国絵図をもとに作成された日本図とする説を否定することはできないのであるが、今後さらに他国での検討が必要となる。とはいえ、この日本図が正保以前の寛永期に作成された国絵図を基にしたことや、描かれた越中の内容が寛永A日本図より後のものであることに変わりはない。

なお、この日本図は黒川を飛騨への交通の要路として重視して記載していることに注意される。この点は先に見たように寛永A日本図の特徴でもあった。

最後に、城下町を見ると、この日本図は富山に加えて「高岡」も城下町として記載する。高岡は一国一城令で廃城となっているが、この絵図では城下町記号の□で記載されている。また、今石動・福光間に元和2年(1616)成立の安居、今石動・黒川間に元和3年成立の新町こと戸出を記載し<sup>(19)</sup>、さらに、加賀では城下町は金沢だけで、寛永16年に再建された城下町の小松を金沢と区別していた。以上からもこの絵図は元和以前の国絵図を基にしたものではなく、高岡が赤で富山と同様に城下町として描かれているのは写し誤りとなる。なお、この日本図は国絵図と異なり古城は描かない。

## 二、正保以降の日本図

### 1、正保日本図

寛永期の日本図に次いで幕府が作成したのが正保国絵図を基にした日本図である。この日本図は明暦の大火で焼失したが、幕府は寛文9年(1669)より道度調査を行って改めて日本図を作成した<sup>(20)</sup>。これらの原図も存在しないが、正保日本図には次の写の日本図がある<sup>(21)</sup>。

ア、秋岡コレクション(国立歴史民俗博物館)  
「徳川幕府撰日本図」

彩色・手書・一舗  
二二七五×二五三七センチ

イ、大阪府立中之島図書館蔵「皇國道度図」

彩色・手書・二舗  
八三・四×一六二センチ(東日本)  
一二八・七×一七七・六センチ(西日本)

ウ、国立史料館蔵「日本総図」

彩色・手書・一舗  
二六一×二四〇センチ

これらの日本図については藤井讓治氏が、最初に作成された日本図の写が国立史料館の日本図であり、明暦4年(1658)以前にこの絵図は作成されたもので、原図は承応2年(1653)以前のもものと指摘する。そして、改めて寛文9年(1669)以降に作成されたのが秋岡本と中之島本としている<sup>(22)</sup>。

残念ながら日本図作成の基になった国絵図もすべて焼失し、写も若干簡略なものが残されているだけである。しかし、幸いにも加越能三カ国については下図でも幕府へ提出した絵図に近い完成度の国絵図が加越能文庫に残された。この越中の国絵図<sup>(23)</sup>も踏まえて、正保日本図の要点を表4に整理した。

まず始めに、秋岡本と中之島本との違いを見ておきたい。彩色は中之島本がより濃いものとなっていることに加え、国ごとの色使いも違っている。また、秋岡本は1枚図なのに対して、中之島本が2枚に分割されている違いがみられる。ただし、全体としての大きさに大きな差異はなく、両日本図は原図の内容を比較的よく写している可能性が大きい。そして、この内容にもそう違いはない。もちろん、若干の違いはあり、これは海路記載である。秋岡本は日本海地域や東海以北の航路をほとんど記載していないのに対して、中之島本は銚子から仙台近辺までの航路記載を欠いているだけである。

越中部分の記載内容も図4・5に示したようにほとんど同じである。しかし、若干の違いがある。図4に見るように秋岡本も越中だけは海路を描くが、航路が放生津より伸びているのに、中之島本は伏木より記載されている。湊の注記は次の通りである。

九月ヨリ三月迄舟通ナシ、無風時漁舟出入ナシ  
越後今町江廿九里、能州三崎へ卅四里

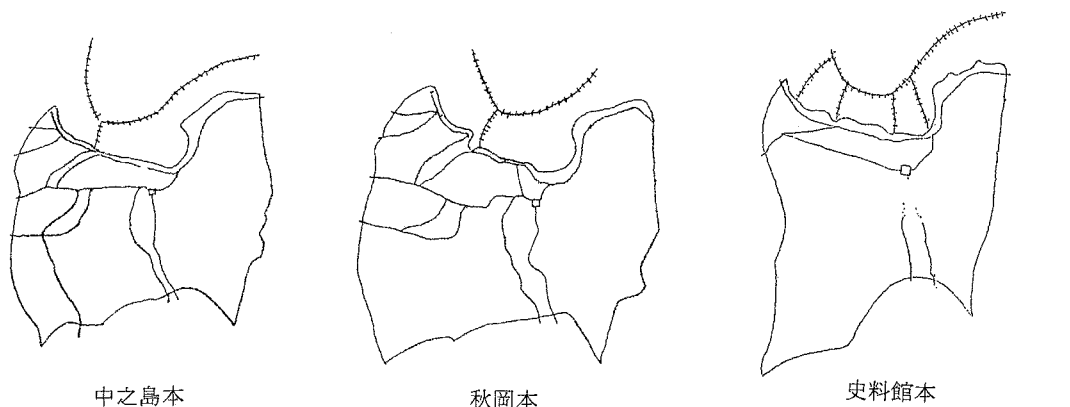
前者では放生津辺に記載されるが、後者は岩瀬のところに記されるという微妙な違いがあるだけである。これが岩瀬についての注記であることは後に示す国絵図の記載からわかる。

山の描き方の違いもある。図5に見るように秋岡本は単純な山形一つに「立山」を付記しているが、中之島本は「立山」注記のある山は二つの山が描かれている。また、雄山に当たる山の形状と劔の形状を違えて描いている。より詳しい中之島本の方が原図に近いとみてよい。

表4 正保日本図

	秋岡本	中之島本	国立史料館本	加越能本国絵図
海路	越中部分のみ記載 放生津から結ぶ 航路記載 湊の注記（放生津に）	あり 伏木から結ぶ航路 湊の注記（岩瀬に）	あり 氷見・伏木・岩瀬・ 小津から航路記載 湊の注記なし	あり 氷見・伏木・岩瀬 小津から航路記載 湊の注記（氷見・伏木・ 放生津・東岩瀬・水橋・ 小津に） 唐島のみ 布施瀧。放生津瀧は あるかなしか程度の記載 国境他に山並み 立山を信州境に 黒部奥山記載なし。 雄山に「立山」記載 山頂と一の越他に小 社殿。剣はでこぼこの 柱状の複数の岩山 薄青色。多数の河川記載
島瀧	なし なし	なし なし	なし なし	
山	信州境に「立山」の 注記の山のみを描く	信州境に「立山」記載の 山を二つ描く	国境方向に山並み 信州境方面に特異な 形で立山を描く 「立□」の記載	
川	薄青色。神通川・庄川 小矢部川	薄青色。神通川・庄川 小矢部川	記載なし	
城下町 道	□記号、富山 赤線（別表参照）	白色□に富山 赤線（別表参照）	白色□に富山 赤線（別表参照）	□記号内に「富山町」 赤線
備考	国立史料館本は国立史料館蔵「日本総図」、加越能本は金沢市立玉川図書館近世史料館蔵加越能文庫「加越能三箇国絵図」			

正保日本図



元禄日本図

享保日本図



図4 正保・元禄・享保日本図の描く越中と交通路

こうした若干の違いは写す作業の中で生じたものであるが、詳しい街道記載にもみられる。これは表5に整理した。この違いは飛騨街道の記載にみられるようにより中之島本の方が正確といえよう。

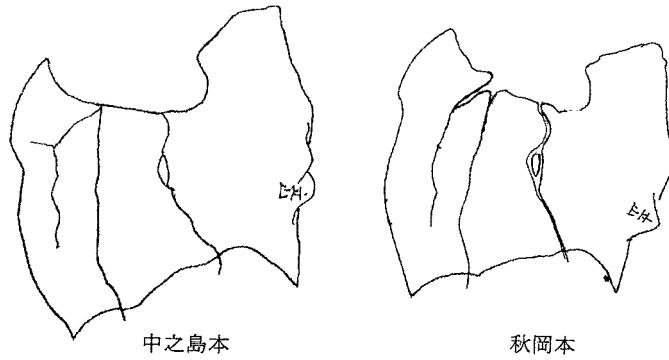
以上による限り両本のうち原本に近いのは、彩色

と海路・立山・街道の記載などにより中之島本となる。

そこで、明暦大火以前に作成されたと指摘されている日本図の写である国立史料館本と比較しながらみることにする。

表4に示したように国立史料館本と秋岡・中之島

正保日本図



享保日本図

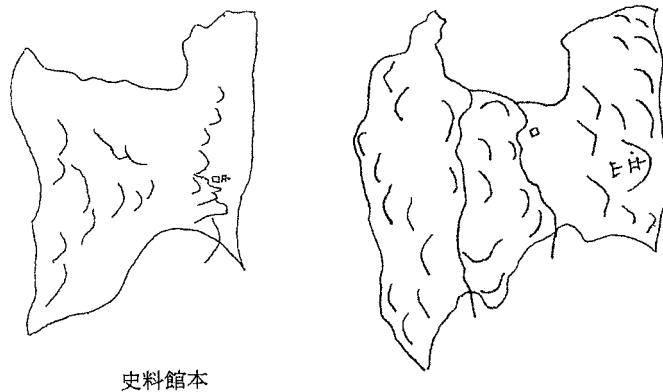


図5 正保日本図・享保日本図の山・川

両本とは若干記載内容の精粗での違いがみられる。しかし、共通して島や潟の記載がない。元図の国絵図は唐島を描くが正保日本図の両原本には省略されているとみて間違いはない。また、潟も国絵図に布施

潟が大きく描かれ、放生津潟がきわめて小さく描かれているだけであった。このため両日本図原本でもともに同じく略されたとみてよい。

両系統の正保日本図ともに海路や湊の注記がみら

表5 正保日本図の街道記載

表5, 正保日本図の街道記載

中之島本 (秋岡本)	北陸街道：「今石動」－「中ノ宮」－「水戸田」－「富山」－「西水橋」－「小津」－「沓懸」（「沓掛」）－「泊町」－「塚」 村」（「塚」）－（越後） 能登道：「今石動」－「伏木」－能登境（道は切れる） 浜街道：「伏木」－「放生津」－「西岩」（「西岩瀬」）－「西水橋」 高岡・放生津道：「今石動」－「高岡」－「放生津」 飛騨街道東道：「富山」－（神通川右岸沿い）－「笹津」－「猪谷」－（飛騨） 同 西道：（富山の神通川対岸より少し西）－「城尾」（欠）－「加賀沢」（欠）－（飛騨） 巡見使道：「中ノ宮」－「福光」－「□□」（「二宮」）－「□赤尾」（欠）－（飛騨） 脇道：（水戸田・庄川間）－（福光）
国立史料館本	北陸街道：「今石動」－中田－水戸田－富山－魚津－沓掛－□□－（越後） 能登道：今石動－伏木－氷見－脇村－（能登） 浜街道：伏木－放生津－岩瀬－小津 飛騨街道東道：富山－（道筋ハガレ）－猪谷－（飛騨） 同 西道：富山－（道筋ハガレ）－加賀沢－（飛騨）
国絵図	北陸街道：「今石動町」－中ノ宮村－中田町－水戸田村－富山－東水橋村－魚津町－沓懸町－境村－（越後） 能登道：今石動町－伏木村－氷見町－宇波村－脇村－能登国境 浜街道：放生津町－西岩瀬－東岩瀬－西水橋 高岡・放生津道：（今石動）－高岡町－放生津町 飛騨街道東道：富山町－布市村－□□村 同 西道：（富山町の神通川対岸の五福村西）－下井沢村－猪谷村－（飛騨） 巡見使道：中ノ宮村－（福光村）城端町－（五ヶ山）－（飛騨） 脇道：中田町－井波町－福光村－ 他、略

備考、秋岡本は秋岡コレクション「徳川幕府撰日本図」、中之島本は大阪府立中之島図書館蔵「皇國道度図」、国立史料館本は国立史料館蔵「日本総図」、加越能本は金沢市立玉川図書館近世史料館蔵加越能文庫「加越能三箇国絵図」



れる。幕府が国絵図作成の際にこの海路や湊の状況も重視したので、当然にこれが日本図にも反映されることになる。しかし、両系統の日本図には内容に若干の違いがある。国立史料館本は氷見・伏木・岩瀬・魚津から能登・越後へ向かう航路に連結している。これに対して中之島本は伏木からだけ結んでいる。湊についての注記は国立史料館本にないが、これには氷見を中心とした航路注記が富山湾岸の氷見から魚津の間の沖合に、「氷見より三崎へ廿六里」と記載されている。

正保国絵図の湊と航路の記載は氷見・伏木・放生津・岩瀬・水橋・魚津にみられるものである<sup>(24)</sup>。両系統の正保日本図ともその原本は湊の状況の注記を国絵図よりも省略したが、中之島本・秋岡本系統図原本は岩瀬湊の注記のみ採用しているので、中之島本の記載のままの可能性が大である。しかし、これより早く成立した国立史料館本の原図では、航路について氷見からの航路距離の注記だけをして、また能登・越後への航路に結ぶ湊からの航路記載は詳しく、代わりに個々の湊の注記を省いている可能性がある。しかし、氷見は城米積み出し湊であっても他国船が多数入る湊とは異なるので、場合によっては航路距離は氷見ではなく、伏木ないし岩瀬が誤ってこのように写された可能性も考慮しておく必要がある。

海に対して山の描写となると、国絵図では多くの山を描くが、特徴のある描写をした山は立山のみであり、これには雄山に「立山」注記が行われ、山頂まで各所に社を描写する。また、立山の隣に複数の柱状の山を描いており、これは劔を描いているとみられる。これに対して2系統の正保日本図の描写は異なる。図5に見るように中之島本・秋岡本の系統図は信濃境に立山のみを描き、しかも秋岡本は単調な山一つを描く点で異なるが、中之島本は「立山」記載の雄山の隣にもう一つの山を描く。ただしこれも劔に対応する山は国絵図と異なる2峰を持つなだらかな山として描かれている。国立史料館本は信濃の国境の手前に立山を描く点で大きく異なる。これは立山連峰以外の山並みもかなり描いているが、この立山は雄山と劔を描くものこれも国絵図と異なった山の形状を描いている。雄山は尖った山並として描かれ、これに隣する劔も複数の峰を持つ尖りぎみの山を描いている。この描写や他の多くの山並み記載も元図を受け継いだものである。しかし、

この元図にしてもこの後に成立した正保日本図の原図にしても立山を雄山・劔の2峰とする点での変わりはない。

次ぎに川であるが、国絵図には数多くの記載があるのに対して図5に見るように両系統の日本図は異なっていた。特に国立史料館本は記載がまったくない点で異なり、この原図は川を省いた可能性があることになる。これに対して同様の記載を持つ中之島本・秋岡本の原図は神通川と小矢部川・庄川の記載だけとみてよい。

中之島本の神通川の流路は国絵図に対応している。国絵図によると富山町南西の新川郡布瀬村と婦負郡鶴島村の間で二股に分かれ、その南の新川郡神通村・婦負郡板倉村の間でこの二つの流れがまた合流し、この間が中州のような状態を呈しているが、この状況は中之島本・秋岡本にも同様に描かれている。

なお、庄川の記載が中之島本と異なって秋岡本は国絵図と若干異なる。庄川が小矢部川の河口から少し遡って庄川を分岐させるのではなく、庄川が放生津西側で富山湾へ直接注いでいるように描かれている。この間違いは国絵図に描かれた放生津・六渡寺間で富山湾に注ぐ川が誤って庄川の河口として絵師に取り入れられたものであろう。そして、前記のように原本に近いのはこの秋岡本ではなく、中之島本であった。

最後に街道であるが、前記のように正保国絵図作成に際して交通路の掌握を幕府は重視した関係で、諸大名に道帳、道程帳を提出させていた。このため国絵図には街道記載が詳細である。両系統の日本図などの記載する街道は表5に記した。

日本図は沿道の町の注記とともに街道記載が詳しいが、当然に国絵図と同様というわけにはいかない。また、国立史料館本は中之島本・秋岡本よりも記載街道は少ない。宿駅制の設けられた北陸街道・能登道に加えて飛騨街道東西道に浜街道だけの記載となっている。これに対してやはり寛文の道度調査以降に作成されたと指摘されている中之島本・秋岡本は国立史料館本よりも詳細である。前記の街道に加えて、中の宮から福光への巡見使道をさらに五ヶ山・飛騨までの街道につなげて書き、中田から福光への街道も記載している。こうした中之島本などの記載は原図を正確に写しているとみて間違いはない。

## 2, 元禄日本図

正保以降に作成された日本図に元禄と享保の日本図があった。この元禄日本図の原図もその存在は知られないが、明治大学図書館蔵芦田文庫「元禄日本総図」・静岡県立図書館蔵「皇国沿海里程全図」の各写図のあることが知られている。「元禄日本総図」「皇国沿海里程全図」は内陸の記載を簡略にした沿岸地方を主にした絵図であるが<sup>(25)</sup>、このうちなんとか内容が判読できる写真は次の芦田文庫の日本図である<sup>(26)</sup>。

芦田文庫蔵（明治大学図書館）「元禄日本総図」

彩色・手書・二舗

一一四・五×一八五・五センチ（東日本）

一一五・八×一四〇センチ（西日本）

この日本図を見ると、やはり越中の部分に川・山・瀧などは記載されていない。海路と街道の交通路中心の記載である。

図4に見るように海路は能登・越後へ通じる海路が氷見と伏木、および写真では判読が困難であるが、岩瀬・魚津と記載されているとみられる場所から記されている。そして、街道は「富山城」から越後・加賀へ伸びる北陸街道筋に飛騨街道が記載されているが、この飛騨街道は飛騨より美濃へ向かわずに信州へ伸びている。なお、富山の位置がこの絵図ではかなり伏木よりに描かれている問題がある。

現存するこの日本図写はこのような簡略な絵図であった。このため国絵図との丁寧な比較はしないが、この国絵図には寛文期に富山以北で流路が二股になり富山湾に注いだ神通川のその姿が描かれるものの、正保国絵図同様に放生津瀧をきわめて小さく描いたこと、また藩用図として作成された延宝国絵図にはこの放生津瀧が布施瀧より大きく描写されていることを指摘しておきたい<sup>(27)</sup>。

## 3, 享保日本図

元禄日本図はこれまでの絵図とくらべて図形が劣り、その出来具合がよくなかったために、再度日本図編成が享保2年（1717）から始められた。この時は国絵図編成は行っていないので基本は元禄国絵図となるが、日本図の精度を高めるために諸国の見当山の調査などを実施して作成している<sup>(28)</sup>。

残念ながらこの日本図の原本は存在しない。白黒

写真でこの関係図とみられる日本図が『日本古地図大成』に掲載されているが<sup>(29)</sup>、その写真は古いもので越中の記載がまったく判読しがたい。しかし、街道がかなり詳しく書かれていることはわかる。

これに対して現存するのは原図を三分の一程度に縮めた次の秋岡コレクションの絵図と指摘されている<sup>(30)</sup>。

秋岡コレクション「享保日本総図」

彩色・手書・一舗

二〇四×一二〇七センチ<sup>(31)</sup>

この縮小された秋岡本であるが、縮小本のためか記載内容はやはり簡略である。図5に見るように島や瀧の記載はやはりなく、記載された川も庄川と神通川のみで、小矢部川も略されている。これは上流を他国に持つ重要河川のみを描いたとみられる。また、神通川は河口が二股川として描かれていないし、飛騨まで分流する流れなどの記載はない。山については模様の多くが図式的な山形で描かれている。ただし、この絵図も立山だけはその注記をするが、これも他の山と同じ形で少し大きく描いているだけである。

能登・越後へ通じる海路は、この図では伏木と魚津の所から伸びている。ただし、湊記載では「氷見」と「岩瀬湊」の記載がそれぞれ適正位置に記載されている。街道は城下町記号のある「富山」から加賀・越後へ通じる北陸街道と高山と考えられる場所へ結ぶ飛騨街道に加えて、富山から西岩瀬・放生津方面へ向かい氷見から能登へ通ずる浜街道が記載されている。そして、北陸街道だけは一里の記号が付されている。なお、飛騨街道は飛騨街道西道を記載し、東道は省略している。

このような簡略な絵図なのでこれも国絵図との丁寧な比較はしないが、元禄の国絵図<sup>(32)</sup>で問題となるところだけを示しておく。それは国絵図が描く神通川は河口が二股川であるし、また富山の少し南に二股に分流している箇所がある。前記のようにこの日本図はこれを省略して一本の流れとして描いていた。また、街道については正保の国絵図を訂正して能登へ通ずるように浜街道がこの元禄国絵図に描かれていたが、これはそのまま採用されてそのように日本図は記載している。

## 終わりに

享保以前の幕府撰日本図で原図とみられる日本図で残存するのは国会図書館蔵の日本図だけであるが、他の日本図にも幸いに写が残されていた。ただし、この写には享保日本図写のように原図を縮小したものがあつた、また正保日本図でも最初に作成された日本図写も小型の一枚物であることを考慮すると原図の縮小版の可能性があつた。こうした限界はあるというものの、特に初期の寛永期に作成された二つの日本図や正保の改定版の日本図、元禄日本図については、直接にこれらの絵図にどのように越中が描かれたか把握できる。また、正保の最初の日本図や享保の日本図の写からも、それぞれの写にどのように越中の姿が描き込まれたのかは当然ながら確認できる。そして、本稿では残存する幕府撰の越中国絵図との比較も行ってこれらの点を検討した。

享保以前の日本図の検討により判明したことを、まず正保以前の寛永期の二つの初期日本図について取り上げると、国絵図にて描かれた唐島などの島は省略されたとみてよい。また、南葵文庫蔵「越中国図」<sup>(33)</sup>の慶長系国絵図や本文で取りあげた寛永国絵図略図に描かれた堤・池の記載はどの日本図にもないが、この二つの寛永日本図については放生津瀉が記載されないのに対して布施瀉が記載されていた。つまり、日本図に描かれるような大きな島はない国であるが、能登近くに瀉のある国として描かれていた。

川については、神通川・小矢部川・庄川の代表的三河川以外にも黒部川など新川郡の主要河川も描き、越中東部に多くの河川のある国としての表現となっている。そして、特に流路の点では四十八ヶ瀬と呼ばれた黒部川が支流で四つに分かれる特徴的な姿で記載され、また庄川も特にいわゆる慶長日本図の寛永16年日本図では小矢部川へ合流する手前で三つの流れの特徴的な姿で描かれているが、両絵図ともに神通川・庄川・小矢部川の河口辺の記載は略記されて、分流やデルタの記載がなく直接に富山湾に注ぐように記載されている。山については、越中を取り囲む国々との境の方面に山並みのある国で、これを代表する信仰の山でもある立山については寛永16年日本図は特別な描写をしていないものの、その後の寛永期越中を描いた日本図は信州境に特別な山の姿を描いたが、これには立山と劔御前の注記が行わ

れた可能性がある。

次ぎに交通路であるが、初期日本図の越中には海路記載がない。街道は寛永16年日本図では北陸街道・飛騨街道・能登道のみを簡略な街道記載に対してもう一つの寛永期を描く日本図は詳細に街道を記載する。しかし、この二つの寛永日本図の場合は越中の街道の要地として富山ではなく、黒川を位置づけて表現していた。すなわち、越中の中心街道、北陸街道から分かれる飛騨街道の分岐点を黒川とし、しかも越中の中心的位置に黒川を記載している。

寛永16年日本図は越中について高岡建設以前の慶長期を描いていたために黒川が飛騨街道の起点として記載されるのは了解されるが、寛永10年図とされる日本図が黒川を飛騨街道の起点として描くのは注目される。この寛永10年に富山城は廃城になっていないものの、城番が置かれるだけで、まだ富山藩も借城しておらず、寛永16年以降の富山藩借城や寛文期の城下町化の時期と違って越中内での都市としての中心性が強くなかったことは間違いない。また、慶長13(1608)年までの近世初期に富山の南の陀羅尼寺村に土方氏が拠点を構え、領地をも持っていたこともあつたか<sup>(34)</sup>、寛永期においても黒川が飛騨街道への分岐地として位置づけられ、表現されたのであろう。

以上のように、初期の寛永期の二つの日本図の描く越中は、能登半島付け根の富山湾に面した国であるものの大きな島はないが、能登国の近くに瀉のある国で、富山湾に飛騨から流れる神通川・庄川を初め、越中東部も加えて数多くの川が富山湾に注ぎ、三方を山に囲まれた国として描かれている。また、寛永期を描いた日本図では立山・劔御前の山を特別な山として描写していたが、この初期日本図では飛騨街道の起点として黒川を重視して記載しているのも特徴的であつた。

次ぎに正保から享保の日本図を取り上げると、これらの日本図も島は省略していたが、これに加えて瀉も記載しないようになっていた。越中一の瀉である放生津瀉がきちんと正保・元禄の国絵図に描かれなかった結果、日本図にも放生津瀉は描写されなまになり、越中は日本図に描かれるような島も無ければ、瀉もない国となった。つまり、これらの日本図だけを見る者はそのような認識を持つことになる。

この正保以降の日本図はこれ以前の絵図と異なつ

て、やはり越中唯一の城下町である富山城下を越中の街道、交通路の中心として描くようになっていた点が大きな特徴となっていた。またこれらの日本図には海路記載も加わった。この海路へ結ぶ越中の湊町は伏木・岩瀬・魚津・氷見などが記載され、これは日本図により異なるものの伏木からどの図にも航路が引かれているが、岩瀬からも航路記載があるものが多い。なお、街道については正保の改定日本図が詳しく街道を描いたが、他の日本図は簡略化されて北陸街道・飛騨街道・能登道の記載が行われる程度であった。

これらの日本図では川の記載も行われぬか、記載されても神通川・庄川・小矢部川の若干の代表的河川のみが描かれ、数多い越中東部の河川が描かれていない。山については元禄日本図は省略したが、正保改定日本図は立山のみを国境に描き、特に立山と注記し、越中を立山のある国として表現している。そして、その立山は雄山・劔・別山の立山三山ではなく、雄山・劔を表すと把握できる二つの山を描写するものであった。

幕府撰の日本図には以上のような特徴を持った越中が描かれたが、これらの日本図をもとにして一般向けの日本図も刊行されていた。刊行日本図がどのように日本やその中の越中を描写したかということは、その受容者である一般の武家や町人その他がどのように我が国土や越中を認識するかという点で重要な問題となる。そこで、刊行図にどのように越中が描かれたかが次ぎの検討課題となる。なお、同じく加賀藩が国絵図を作成した加賀や能登がどのように幕府撰日本図に描かれたかについては次に検討してみたい。

## 註

- (1) (2) 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』(古今書院・1984年) 3篇, 川村博忠『国絵図』(吉川弘文館・1990年) 7章, 秋岡武次郎『日本地図史』(河出書房・1955年) 5編5章, 織田武雄「江戸幕府撰の国絵図と日本図」(中村拓『日本古地図大成』講談社・1974年) 他。
- (2) 前註1 川村『江戸幕府撰国絵図の研究』3篇, 川村『国絵図』7章
- (3) 川村博忠「江戸幕府の国絵図事業と日本総図の集成」(国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房・2005年)・海野一隆「中井家旧蔵の『日

本国中図』(『地図』40巻4号・2002年)。なお、川村「江戸初期日本総図再考」(『人文地理』50巻5号・1998年)・塚本桂大「江戸時代初期の日本図」(『神戸市立博物館研究紀要』2号・1985年)・海野「いわゆる『慶長日本総図』の源流」(『地図』38巻1号・2000年), 海野「図形成立年代と描画年代」(『地図』39巻1号・2001年)・海野「寛永年間における幕府の行政査察および地図調整事業」(『地図』39巻2号・2001年) などもある。

- (4) 前註3 川村博忠「江戸幕府の国絵図事業と日本総図の集成」。
  - (5) 拙稿「近世初期日本図の作成について」(『富山大学教育学部紀要』57号・2003年)
  - (6) 藤井讓治「正保日本図について」(藤井他編『絵図・地図からみた世界像』京都大学大学院文学研究科・2004年)。
  - (7) 秋岡武次郎『日本古地図集成』(鹿島研究所出版会・1971年)・前註1 中村拓『日本古地図大成』に写真版・同複製が収録されている。
  - (8) 川村博忠編『江戸幕府撰慶長国絵図集成』柏書房・2000年
  - (9) 拙稿「加賀藩の国絵図作成と越中国絵図に描かれた地域」(『氷見市史』資料編6・絵図地図編, 2005年)
  - (10) 前註1 川村『国絵図』7章
  - (11) 前註3 海野一隆「中井家旧蔵の『日本国中図』」
  - (12) 国会図書館蔵日本図写真は前註1 中村拓『日本古地図大成』に収録。
  - (13) 前註5 拙稿「近世初期日本図の作成について」では幕府が日本図を作成したとする記録がないが、越中の描写内容、特に越中最大の瀉である放生津瀉を省略して布施瀉のみを描いた点を拠り所にして幕府へ提出した国絵図も原図としていると判断した。ただ、前田氏が豊臣政権へも放生津瀉を欠いた絵図を出していたとするならば海野氏の指摘するように(前註3「中井家旧蔵の『日本国中図』」)慶長初年の国絵図を基にしたことになる。
- なお、黒田日出雄氏は寛永16年日本図の下図として南葵文庫蔵の「日本国全図」を紹介しているが(「南葵文庫の江戸幕府国絵図」24完『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』24号・2004年)、この下図の

- 描く越中の描写は、越中については高岡建設前の慶長期の越中を描く寛永16年日本図と異なるのでこの下図となるか不明である。
- (14) アは原本を閲覧・撮影。イは前註8川村博忠編『江戸幕府撰慶長国絵図集成』収録。
- (15) この国絵図については川村博忠『寛永十年巡見使国絵図日本六十余州図』(柏書房・2002年)の「解説」参照。本稿では佐竹文庫蔵「日本六十余州国々切絵図」「越中国」を図版に示したが、他に池田文庫蔵「越中国図」・富山県立図書館蔵「越中国図」なども参考にした。
- (16) 『宇奈月町史』(宇奈月町・1969年) 584・585頁。同書は「菊池旧記(富山大学図書館蔵)により指摘。なお、同書は渡船の伝承も紹介する。
- (17) 前註1川村『江戸幕府撰国絵図の研究』3篇
- (18) この点は拙稿「近世初期日本図の作成について」と拙稿「加賀藩の国絵図作成と越中国絵図に描かれた地域」(『氷見市史』資料編6・絵図地図・2004年)参照。
- (19) 『歴史地名大系・富山県』(平凡社・1994年)の該当項目参照。
- (20) 前註1川村『国絵図』7章2。前註3川村「江戸幕府の国絵図事業と日本総図の集成」
- (21) アは前註7秋岡武次郎『日本古地図集成』に収録複製。イは前註1中村拓『日本古地図大成』の収録図版。ウは原本を閲覧・撮影。
- (22) 前註6藤井讓二「正保日本図について」
- (23) 「加越能三箇国絵図」(『氷見市史』資料編6絵図地図編・図3複製)参照。同書の拙稿国絵図解説も参照されたい。
- (24) 正保四年「越中国道程帳」(加越能文庫蔵)。
- (25) 前註1川村『国絵図』7章, 秋岡武次郎『日本地図史』5編5章
- (26) 前註1中村拓『日本古地図大成』・『蘆田文庫目録』古地図編・口絵(明治大学人文科学研究所・2004年)。なお、写真版では氷見からの海路があるように見えるので、図にはこのように記載した。ただし、海路についての注記は判読できない。
- (27) 前註9拙稿「加賀藩の国絵図作成と越中国絵図に描かれた地域」参照。
- (28) 前註3川村博忠「江戸幕府の国絵図事業と日本総図の集成」と前註同1川村博忠『国絵図』。
- 7章
- (29) 前註1中村拓『日本古地図大成』
- (30) 前註1, 川村『国絵図』7章
- (31) 前註7秋岡武次郎『日本古地図集成』に収録。
- (32) 石川県立図書館蔵の写図「越中国高都合并郡色分目録」。これは『氷見市史』資料編6・絵図地図編の図5に収録。
- (33) 東京大学附属図書館蔵
- (34) 松山充宏「越中布市藩の模索と挫折」『富山県日本海文化研究所報』31, 2003年
- (2006年5月22日受付)
- (2006年6月28日受理)